

## 介護基礎教育における移乗技術の探求 2

## A Research on Transfer Skills in Basic Care Education 2

太田眞智子  
Machiko OOTA

中村 幸子  
Sachiko NAKAMURA

新井 幸恵  
Yukie ARAI

## 要 旨

高齢や障害により援助を必要とする人々にとって、日常生活を安楽・安全に過ごし、さらに生活を豊かに彩るための移乗技術は大切である。介護基礎教育においては、要介護者の尊厳を守り、根拠に基づいた知識と技術の指導が重要となる。

筆者らは2005年より基礎的移乗技術の教育に関する文献研究を行い、移乗技術の重要な知見を得、さらに基礎教育充実のために、介護技術演習にかかわる教員の共通認識、統一した指導の必要性から「基礎移乗介護技術演習のポイント」<sup>1)</sup>を作成した。

この移乗技術の習得には、大学における基礎教育と施設等の介護実習体験による連携・統合は不可欠である。そこで、実習施設における移乗技術についてのアンケート調査を行い、さらに学生の介護実習後の「移乗技術に関する記述」について分析した。

その結果、授業である介護技術演習と施設等の介護実習での共通点、及び相違点が明らかになった。実習施設にはその施設毎の歴史や運営指針があり、移乗技術における背景を理解し、連携した上での学生指導が求められる。また学生は、介護実習において介助の個別性についての視点を深めていることがわかった。これらを踏まえ、介護実習前後の指導上の示唆を得た。

## はじめに

高齢となり不自由があっても、どんなに重い障がいを持って、その人らしい日常生活を豊かに過ごすために、安全で安楽な移乗技術は重要である。移乗技術は、援助を必要とする人々の日常生活支援のすべてに関わる。移乗技術は単なるベッドから車椅子へ移乗するためのテクニックではな

い。援助を必要とする人たち（要介護者）の個別の状況に合わせて「その人」の移乗を援助する。意欲を引き出し、生活の質を高め、ひいては「夢」を実現するための介護観と幅広い知識そして技術が統合されたものである。この移乗技術は、介護技術の中でも難易度が高く習熟を要する技術のひとつであり、基礎的技法と個別的な応用力をしっかりと習得することが重要となる。介護基礎教育

においては、要介護者の尊厳を守り、そのための根拠に基づいた基礎的技術の指導が求められている。

筆者らは2005年より基礎的移乗技術の教育に関する文献研究を行い、以下のような移乗技術の知見を得た。

- ① 要介護者の意思や機能を十分活用し、可能な動作を尊重した方法であること。
- ② 安全、安楽、安心な移乗のためには、要介護者・介護者双方の心身のアセスメントを行う必要がある。
- ③ ボディメカニクス等の原則を前提に、人間の自然な動きに合った、持ち上げない手法を多用すること。
- ④ 要介護者の安全・安心の為に、諸原理を応用した福祉機器や道具を活用・開発し、積極的に人力を補うこと。
- ⑤ 多くの移乗技術は、それぞれ専門家の指導の下にトレーニングが必要であること。

その上で基礎教育充実のために、介護技術演習にかかわる教員の共通認識、統一した教授の必要性から「基礎移乗介護技術演習のポイント」<sup>1)</sup>を以下の通り作成し、それに基づき、介護技術演習を行ってきた。

- ・移乗の目的説明、同意
- ・車椅子の点検、セッティング位置
- ・安全で安定した臥位から端座位への過程
- ・要介護者の足の位置、患側への配慮
- ・介護者の移乗時の把持方法、十分な支え・車椅子上の安楽、安全、安定
- ・要介護者の意志の尊重、適切な言葉かけ

授業においては上記の基礎技術習得に加え、自立支援また全介助を必要とする要介護者を想定してロールプレイや擬似体験を行っている。

しかし大学での演習では、要介護者の麻痺状態や筋力低下など、形態別個別性を想定するには限界がある。実習現場である施設では、認知症等によるコミュニケーションの取りづらさなど様々な

異同があり、学生には初めて出会う戸惑いがある。その戸惑いを意識化し、施設実習の体験内容を再度、意味づけする必要がある。また授業で伝える基礎技術と実際の施設等の技術とは乖離があり、学生が混乱する状況があるのではないかと考えられ、教員自身も実習施設での技術について、理解する必要性と共に、連携の重要性を感じてきた。そこで、実習施設における移乗技術について、実習指導者へのアンケート調査を行った。さらに、実習における学生の移乗技術体験の記述を分析した。

その結果、授業である介護技術演習と施設における移乗技術の共通点及び顕著な相違点等が明らかになり、今後の介護基礎教育における移乗技術の教授法について、示唆を得たので報告する。

## I. 研究の目的

実習施設での、利用者の個別性に適応し、かつ状況に応じた移乗技術を把握する。さらに学生がとらえた移乗技術の個別性の視点を明らかにし、介護基礎教育の課題を探る。

## II. 研究方法

### 1、実習施設アンケート調査

#### (1) 研究調査方法

実習施設の実習担当者に、移乗技術に関するアンケートを送付し、郵送にて回収した。

#### (2) 調査対象 介護実習施設23施設の実習指導者 (回収数 11施設12人 回収率 48%)

#### (3) アンケート内容

要介助者を一人想定し、施設で行われている移乗技術について自由に記述していただいた。

具体的内容としては、車椅子選択・コミュニケーションや声かけ・臥位から車椅子へ移動・車椅子上での座位保持までの一連の移乗技術について。さらに移乗技術関連として労作環境等についての質問、及び実習における

学生への指導上の要望等である。

- (4) 研究期間 2006年4月～12月（アンケート回答8月30日～9月30日）

## 2、学生の実習における移乗技術体験の記述の分析

- (1) 調査対象 十文字学園女子大学人間福祉学科介護コース2005年度生（2年生次）25名（実習施設14施設）
- (2) 方法 学生の移乗技術に関する記述の分析  
介護実習Ⅱ段階終了後、新たに学生が移乗技術体験を記述したもの（以後「学生の実習における移乗技術体験の記述」と記載する）を、実習施設との共通点、相違点等、その他に分類し分析を行う。

- (1) 研究期間 2007年6月～7月

## Ⅲ. 結果

### 1、「実習施設アンケート結果」および「学生の実習における移乗技術体験の記述」の共通点として以下を見出した。

- (1) 個別性の視点・意志を尊重した適切な声かけの重要性

#### 1) 実習施設アンケートにおいて

コミュニケーションや声かけ、個々の利用者に合わせた介護について、ほとんどの施設で記述があり、各々特徴的な内容であった。

- ・介護者への信頼感の上で、指示を理解できているか確認する必要がある。
- ・一人ひとりに合う言葉を模索する。個人や状況によって、様子を見ながら一つひとつの動作について、言葉かけを行う。
- ・不安そうな表情であれば、個人の安心できる言葉をかける。
- ・簡単なことば、明瞭なことば、ゆっくり

した口調、笑顔を大切にし、不安を与えないよう配慮する。

- ・タイミングを合わせる。

など意思確認・導入の声かけの必要性はすべての施設に共通し、特に認知症の重い方へは様々な気遣いがみられた。移乗のためには、介護者として「利用者からの信頼が大切」との指摘もある。

#### 2) 「学生の実習における移乗技術体験」に関する記述から

声かけを含むコミュニケーションについて、また個々の利用者に合わせた介護についての記述が、すべての学生に見られる。

- ・コミュニケーションは「利用者を知る」第一歩であり、何をやるにおいても非常に大切。
- ・声かけの大切さを再認識した。声かけひとつで利用者の不安の解消、軽減につながる。
- ・声かけをはっきりし、次の動作が分かるように配慮する。
- ・利用者に、手を付く位置や足の位置等「情報を正確に伝える。」
- ・利用者の状態や体調（日々によっても変化あり）によって介護方法が異なる。介護の仕方を工夫する必要がある。
- ・基礎技術の上に、個々の利用者にあった介護のあり方は重要であり、利用者にあった声かけが大切である。
- ・体格・心理的側面・健康状態（認知度を含む）・表情・嗜好等々、利用者理解が第一歩となる。そのために観察が重要である。
- ・「自分のことは自分で」「利用者の立場に立って」等、利用者の思いや心情を大切にした介助のあり方が求められる。

## (2) 要介護者、介護者双方の安全や安楽を考えた介護について

## 1) 実習施設アンケートから

どの実習施設においても何らかのボディメカニクスが活用されている。

- ・残存機能を生かす
- ・しっかりとした立位が鍵
- ・力任せの介護をしない
- ・てこの原理の応用
- ・利用者の動きが最低限で済むように考慮
- ・介護者は腰をおとして膝を使う

## 2) 「学生の実習における移乗技術体験」の記述から

実習中「介護をしていて腰が痛くなった」という記述が2名からあり、さらに介護時の姿勢についても次のような記述がある。

- ・利用者、介護者を危険にさらすことのないように、無理のない介護が必要。
- ・腰に負担のかからない介護のあり方が大切。
- ・どうしたら、利用者と介護者が楽に介護できるのか、考えながら行っていく事、工夫

していく事。

- ・自分の体格にあった、やりやすい姿勢を探る。

## 2、授業である「介護技術演習」と実習施設における移乗技術との違いの顕著な例

## 3) 移乗技術として、介護技術演習で基礎的に学ぶ技術と、実習施設で行われている技術には、いくつか違いがみられた。ここでは実習施設のアンケートと「学生の実習における移乗技術体験」の記述を統合して記載する。

表1) に示すように、ベッドから立ち上がり、車椅子（車椅子→ベット）に移乗する際の介護者の手の位置、把持方法。及びその時、介護者の足は、利用者の足の中なのか、外側に位置するのか。車椅子に移乗後、安定して座るため、深く座ることが必要になるが、そのための方法はどういう方法があるか、といった3点に違いがみられた。

その他、大学の介護技術演習では利用者の領域であるベッドに介護者の膝を極力載せな

表1) 大学での移乗技術と実習施設の移乗技術の違い

	介護技術演習で学生が学ぶ技術	実習施設のほとんどが行っている技術
移乗時の介助者の把持方法	移乗時の把持方法は介護者の両手を組む。(ズボンの把持は利用者の股間に食い込む恐れがあるので、行わない) 可能であれば、介助用ベルトなどを活用する。	危険を回避するためズボンを把持する。実習生には特に、慣れるまでズボンの把持を勧める。
移乗の際の介助者・要介助者の足の位置関係	外足介助法をとる。(外足介助法の利点・介護者の支持基底面を広く取り安定する・重心の移動も容易となる・要介護者の外側に位置しながら膝を支持することができ、麻痺側の膝折れ防止となる)	利用者の膝と膝の間に足を入れる、中足介助法をとる。
車椅子に深く座るための工夫	前傾姿勢を取り左右に体重移動し臀部の摩擦を少なくして、膝及び下肢をバックレストに向かって押す方法をとる。(後ろからの引き上げ方法は利用者の麻痺の痛みや胸の圧迫の可能性がある)	利用者の車椅子の後ろから、引き上げる方法。あるいは二人介護の徹底(ほとんどの施設で行われている)

いようにしているが、施設においては、介護者の腰痛対策や、利用者の安全性への配慮から膝を載せている実態がある。また介護技術演習においては、トランスファーボード等の福祉用具の使用方法について説明しているが、実習施設においては、ほとんど見られなかった。

### 3、実習施設のアンケートから、「その他」のまとめ

上記「実習施設アンケート結果」および「学生の実習における移乗技術体験の記述」の「共通点」及び「相違点」以外に「その他」として、以下についてアンケートの記載があったので、項目ごとにまとめた。

#### (1) 介護技術面の特徴的な点

アンケートが、一人の利用者を想定しての記述を求める内容であったため、特徴的な技術について記述があった。介護現場である実習施設においては、利用者ひとり一人に合った技術、施設の独自性や介護者個人の工夫により行われる技術がある。

- ・立位のとれない方の場合、移乗時利用者の両足を介護者の膝で挟む。
- ・利用者の状況に合わせ、ゆっくりと声かけし移乗する場合と、転倒の危険から端座位より素早く車椅子へ移乗する場合がある。
- ・移乗時、立位のためにバー等を把持することが多いが、一度把持すると、離れるのが難しい利用者に対しては、バーを把持しないで行える方法を工夫する。
- ・移乗時介護者と利用者が同じ目線であれば、利用者の健側の手は介護者の肩を把持、高低の差のあるときは介護者のズボン把持する等、身長や体格によっても把持方法も変化する。
- ・端座位時、ツッパリ（原文のママ）のある方

はわざと後方にずらそうとすると、前に重心がかかり安定する。

#### (2) 移乗技術をめぐる労作環境についての質問に対する記載

移乗技術において、利用者介護者双方が安全であるためには、労作環境は重要である。個々の利用者に合った移乗技術についてPTや他職種との連携を重視しているのが9施設あり、腰痛対策として学習会、アンケート調査、ベルト配布、体操等の取組みを行う施設は8施設であった。また移乗介護においては「ベッドの上下操作」は不可欠であるが、5施設にとどまり、1つの施設ではベッドが電動ではないことから、「腰痛の原因」への危惧や操作の大変さを記述している。

#### (3) 『移乗技術等に関し「困っている点」および「解決できた点』という質問に対する記載

「困っている点」は「ハード面での不十分さ」(2施設)を訴え、ある施設では、ベッドの向きが介護の際、利用者の介護方法が逆からになり「事故がおきてからでは遅いと感じている」という記述がある。また「要介護度の進行に伴うマンパワー不足」に関するものもあった。

一方、問題解決のために、介護職同士や他職種との連携による試行錯誤を繰り返しているという回答が、4施設あった。また「ベッド上での上方移動に、ビニール袋を活用している」という記述があった。

#### (4) 「学生への指導上の要望や意見」についての記載

学生の実習に対する姿勢として「基礎を身につけて実習現場に臨んでほしい」。記録に関して「日々の記録について、例えば移乗技

術を頑張る、ではなく目標設定を明確にした記録の方が望ましい」。実習施設が配慮している点として、「最初は見学、その後指導者からの見守りでの実践を行い、最終的には自信をつけて実習が終了できるよう配慮している」また「腰痛を起こさないよう配慮している」。学校側にのぞむ点としては「学生の習熟度について知りたい」や「技術演習での進行状況について知りたい」という内容があった。

#### 4、「学生の実習後の移乗技術体験」の上記以外の記述

「実習施設アンケート結果」および「学生の実習における移乗技術体験の記述」の「共通点」及び「相違点」以外に、以下について記載があったので、項目ごとにまとめた。

##### (1) 介護技術について

利用者を移乗する際の技術面における理解や感想、そして教訓と思われる記述があった。

- ・何度か行うことで、足の位置の感覚がわかってきた。
- ・その時の状態で、上手くいく時といかない時がある。
- ・利用者の立ちたいタイミングを大切にすること。
- ・実習中は不安とあせりで学んだことも分らなくなる。安全のためにも自信を持つ学びが大切。
- ・スムーズに行いたい、という意識から気持ちがあせってしまい、焦ると失敗する。落ち着くことが大切。

- (2) ヒヤリハットや振り返る中で考える技法など事故が起りそうになった状況(ヒヤリハット)や「こうすればよかった」「失敗した」「上手くいかない」という記述がある。

- ・腰が痛くなった。(2名)理由一膝を曲げずに腰を曲げた・ベッドの高さを調整しなかった
- ・利用者が端座位になる時の位置が浅すぎて、ベッドから落ちそうになってしまった。(4名)
- ・最後まで安全に端座位になる位置や、全介助の方の移乗について、コツがつかめなかった。
- ・移乗の際、立位を支える時の、力加減が分からない。
- ・大柄な男性への全介助は最後まで難しかった。利用者を持ち上げようとせず、介護者に寄りかかるような姿勢になってもらい、介護者は腰を低くして支えるべきだった。

##### (3) 実習指導者から学んだこと(介護技術面に関して)

学生は実際の実習指導者と接する中で、移乗技術の難しさや姿勢について学んだことを以下のように記載している。

- ・授業で習得していても実践になると、利用者個々の状態に沿った介護は難しい。
- ・介護が上手くできず落ち込んだ時、職員の方から、観察や声かけなどの基本に戻ってみる、と言う助言を頂き改めて利用者に向き合ってみようと思った。
- ・基本のその上に個々の利用者にあった介助ができるようになること。身体的特徴の理解も必要。
- ・介護は上手く行うというより、安全に安楽に介助することが大切。日常生活の多方面から利用者にあった介助法を学ぶこと。

## IV. 考察とまとめ

### 1、実習施設のアンケート結果から

実習施設での移乗技術は、恐怖心を抱かせない・動作ごとの確認といった安全への配慮、心理的側

面での配慮や、「タイミング」「自立心」といった意志や意欲を大切にしている介護姿勢が見られる。「気づき」「工夫」「介護姿勢」等を大切に、大学での介護技術演習を行なう必要がある。

またその施設の長い歴史の中で積み上げられてきた技術や、さらには利用者ひとり一人と介護者の関係性、さらにハード面に起因する状況があり、結果から得られた「大学での移乗技術と実習施設の移乗技術との違い」にはそうした背景があると考えられる。そのことを理解した上で連携し、信頼関係を築き、個別性に適応した応用力のある移乗技術を深めることが求められる。

一方、著者らが作成した「基礎介護技術演習のポイント」においては、認知機能の低下については想定しなかったが、各施設で想定された方のほとんどが認知症の方であった。施設入所者の8割が認知症といわれる現状から考え、声かけや説明が伝わらないことも考慮した安全な「基礎介護移乗技術演習のポイント」を考える必要がある。移乗技術をめぐる労働環境においては、腰痛対策に取り組む施設が多く、課題の深刻さがうかがえる。利用者、介護者双方にとって安全な介護技術を習得するために、介護者の体づくりは基礎となる。ストレッチや筋力強化の運動等への取り組みが重要である。さらに現在、諸原理を応用した福祉機器や道具の活用、開発そして施設への導入が進められている。実習施設と連携して、福祉機器・道具を活用した介護技術についての研究は急務であり、卒後教育につなげていく必要がある。

## 2、「学生の実習後の移乗技術体験の記述」から

筆者らは人間福祉学科介護福祉コースの「介護実習の手引き」の中で、施設や在宅での介護実習を「あたかもあちらこちらの山の源流から発した小さな流れが、大河となってとうとうと海に注ぎ込むかのようなダイナミックな体験」<sup>2)</sup>と位置づけ、実習の基礎となる教科科目の関連について述べている。学生は、こうした大学の総合的な学習を通

しての理論と実習施設での実践の中で、介護の個別性についての視点を持ち、認識を深めている。移乗技術が単なる移乗のみのテクニックではなく、コミュニケーションやその利用者にあった声かけの上で、移乗するための一つひとつの動作に個別性があることを見出している。介助の個別性の視点とは、介助者が援助を行う上で、「要介護者の独自性・個性に注目して個々人に即した援助を行う」<sup>3)</sup>ための視点である。性別・人格・年齢・体格・健康状態（認知度を含む）・習慣・嗜好・心理的側面に及び、利用者本人の人生そのものに視点を広げて、学んでいることが分かった。

一方、学生は大学の介護技術演習で学んだことや第I段階の実習経験を基本に努力しながらも、実際の利用者への対応、個別性の前に技術的な戸惑いがあり、実習指導者に教わる技法の模倣に終始してしまう状況もうかがえた。基礎的移乗技術の一つひとつについて根拠を考えながら学び、あわせて実習において、その施設の移乗技術や実習指導者の技術を観察し、模倣ではなく主体的な学習につなげていく必要がある。また「うまくいかない」「失敗した」という記述もある。内容的には個別性への視点を持つがゆえに、大学での演習や自主的な練習で行った技術の応用、一人ひとりへの対応の難しさを実感していると言える。それは、「何故失敗したのか」「どうするべきだったのか」という学びの大切さへつなげ、主体的な学習につなげていく教育の必要性を示唆するものである。

そして以上の内容は「分かるようになる・うまくなる・よくなる・楽しくなる・自他共に認められる・役に立っているという実感がもて、さらに自主的に学ぶ自分を育てる」<sup>4)</sup>ことにつながる内容であると考えられる。「基礎移乗技術演習のポイント」を踏まえ、さらに課題学習を通して「状況に応じた判断力や実践力を強化し、個別理論と実践を学ぶための教育手法の開発」<sup>5)</sup>が必要である。

実習を通して学生は、実際の介護現場である施

設実習で忙しく働く施設職員の姿を、自分が介護福祉士として就労する姿と重ね合わせ、個々の利用者の思いに沿った介護の難しさ、大変さを実感している。同時にその難しさの克服の過程を通して、介護福祉士としての役割や誇り、あるべき姿を探っていることがわかる。

以上の事から、学生が介護実習で移乗技術を学ぶために次のような点が重要と考える。

### 1、介護実習前

- ・利用者にとって安楽な、介護者にとって負担の少ない移乗技術を「基礎移乗介護技術のポイント」に基づき、繰り返し学び、しっかり理解し習得する。
- ・その上で、個別性に対応するために、ロールプレイや擬似体験を通して、状況に応じた判断力や実践力を強化する。
- ・学生自身が自分の技術レベルのアセスメントを行い、介護実習の目標設定を明確にすることが重要である。そのためのシートを教員側で作成し、学生は練習を繰り返しながら自己のアセスメントを行う。
- ・教員は、学生が記入したシートを持参し、個々の学生の技術演習内容・習熟度について実習指導者と共有する。

### 2、介護実習中

- ・実習施設で行われている移乗技術に関心を持って「見る」「観察」する。
- ・その上で大学の介護技術演習との違いについて、何故・どうして・どのようにと質問する力を養い、技法の「根拠」について学ぶ姿勢を大切にする
- ・2段階および3段階においては、個別の利用者への移乗技術を実践の中で学び、技術の特徴を把握する力、実践する力を養う。

### 3、介護実習後

- ・実習施設での学びを大切に、「基本的移乗介護技術のポイント」との共通点や違いについ

て整理し、移乗技術について深める。

介護は、生活におけるトータルな支援である。援助を必要とする人が安心できる、一日一日の豊かな暮らしを支える移乗技術のあり方が求められる。高齢になっても、重い障害を持って、生きる意欲を持ち続けられるよう、あらゆる援助の工夫を厭わない、そんな介護福祉士としての巣立ち、そして就労後も育ち続ける彼らの可能性を見守りたいと思う。

### 謝辞

本研究を行なうにあたり、ご協力をいただきました方々に心より感謝いたします。また本研究は平成18年度十文字学園女子大学人間生活学部共同研究費により実施されたものです。

なお本研究の一部は、第13回介護教育学会及び第15回介護福祉学会において発表いたしました。

### 引用文献

- 1) 中村幸子他「介護基礎教育における移乗技術の探求」十文字学園女子大学人間生活学部紀要、2006.
- 2) 十文字学園女子大学人間生活学部人間福祉学科介護福祉コース「実習の手引き」p1 2006.
- 3) 中央法規出版編集部編「介護福祉用語辞典」2004. p114
- 4) 「介護福祉教育」中央法規出版株式会社 2006. NO.21 p33
- 5) 澤田信子他「介護実習指導方法」2003. P45